保育と社会福祉を漫画で学ぶ 31

『エスプレッソ・コーラ』

迫　ともや
（くらしき
作陽大学）

『エスプレッソ・コーラ』を飲んだことはありますか？　え…なにそれ？という反応が正解だと思います。もと療育現場の保育士である、ほっかむりゆり子さんが描いた療育漫画のタイトルです。2023年に連載が始まり、Amazon Kindleで全90巻が無料公開されており、療育や保育の関係者の支持を多く集める作品です。新人の療育保育士（本作品ではこう呼ばれています）の山原先生が療育の現場で経験をつみながら成長していく姿が描かれており、本作をもとにして作画にハシモト氏、監修に小児科医の今西洋介氏が参加したカドコミ版も人気です。

保育の現場ではASDやADHDなどの発達支援が必要な子ども達と、たくさん触れ合う機会があります。障害の認定が明確な子どもだけでなく、いわゆる「グレーゾーン」と呼ばれる、診断の有無だけでは捉えきれない困難さを抱える子どもたちもいます。かれらは「手がかかる子」と扱われることが少なくありません。

『エスプレッソ・コーラ』では、知的障害（軽度～最重度）、ダウン症、強度行動障害、癇癪、聴覚情報処理の困難さ（APDと呼ばれることもあります）、協調性運動障害などをはじめ、二次障害としての引きこもりや登園拒否なども扱われています。

子どもの問題だけでなく虐待や親の離婚、育児に非協力的な家族や、子どもの障害受容など、家庭の問題、さらには保育園や幼稚園の支援体制不足による不適切な保育や事実上の利用継続困難の問題、地域による支援の格差など社会の問題も扱われています。

『エスプレッソ・コーラ』第3巻「ADHD編」には、跳び箱をとべない年長児のわたる君が登場します。多動で衝動的、一番になれないと友達につかみかかったり、高いところに上って吠えたりしたあげく、急に姿を消してしまいます。鉛筆で他児を刺すなどトラブルを起こし、保育園から追い出されることになり、それまで障害に気づけなかった母親は、園長に怒りをぶつけます。

母親「なんで、こんなになるまで障害児って教えてくれなかったんですか！」
園長「わ…私たちは診断機関ではないのであくまで様子を伝えるしか…」
母親「あんまりです。ずっと『あの親は現実を見れていない』って呆れていたんでしょうね。どうも

すみませんね！　でも、もめるのが嫌で親が気づくまで悪い報告をして、陰口を言うのが保育のプロのすることなの!?」（エスプレッソ・コーラ第３巻「ADHD 編」pp.47-49）

手のかかる園児さんが障害をもっているかもしれないことを、たとえ保育者が気づいたとしても、保護者にどう伝えるかは難問です。ベテランでも保護者の様子をみながら手探りで言葉を選び、慎重にその可能性について伝えるしかありません。わたる君の母親のように、わが子の障害を早く教えてくれなかったことで怒る保護者もいれば、わが子を障害者扱いされたことで怒る保護者もいます。

わたる君の担任保育者から見た物語はこうだった。

優しい先生の言うことは聞かないわたる君。クラスが落ち着かず、トラブルが続くため、「このままだと彼が学校で困ります。発達について相談できるところもご紹介できます」と母親に伝えようとした。しかし「じゃあ幼児教室の先生にも聞いてみます…」と返答。たくさんの習い事をさせて、そのたびにわたる君は荒れてトラブルが増えていった。他の保護者からの不満の声が高まり、担任は追い詰められることに。「保育のプロだって暴言と暴力に心を疲弊する。完璧な訳じゃない」。ついに担任は、退職届を提出してしまった（「ADHD 編」pp.53-61）。

療育保育士山原先生の先輩、高野先生は、跳び箱がとべないわたる君に、カエルとびの動きを覚えさせて手をつくタイミングや体重移動のコツを身につけさせる。手足の協調運動が苦手なわたる君は、カエルとびから跳び箱を何度も練習した。山原先生は「何回失敗しようが、最後の一回が成功したらわたるくんの勝ちだ」と声をかける。わたる君はついに母親の目の前で、跳び箱とびに成功する（「ADHD 編」pp.83-133）。

発達障害という言葉は、今や日常的に使われるようになっています。もちろん支援を必要とする背景は多様であり、すべてを医学的診断のみで説明できるわけではありません。文部科学省の調査によれば、通常学級において学習面・行動面で特別な支援を必要とするとされた児童生徒の割合は、2012 年の 6.5%から 2022 年には 8.8%となっています。ただし、調査方法等の違いもあり、単純比較には注意が必要です。

こうした変化を受け、2012 年の児童福祉法改正によって「障害児通所支援」の体系が整備され、児童発達支援という制度が本格的にスタートしました。対象は主に就学前（0〜6 歳）の子どもたちで、個々の発達特性に応じた支援を通じて、自立の基礎を育むことを目的としています。制度開始から 10 年余りで、事業所数は約 3.6 倍、利用者数は約 3.2 倍にまで拡大しています。身近な地域で専門的な療育を受けられる環境は、着実に整いつつあります。

多様な課題をもつ子どもに年齢発達段階だけで捉えた、画一的な姿をあてはめるのではなく、一人ひとりの特性に応じて関わろうとする正面から向き合う支援者の姿は、まさにこの制度が本来目指しているものを体現しているといえるでしょう。

しかし拡大の裏には課題もあります。事業所の質のばらつき、人材不足、地域間格差…量的な拡大が、必ずしも支援の質の向上と比例してこなかった現実もあります。

児童発達支援の現場において、支援の対象は子どもだけではなく、保護者への支援でもあります。発達に特性を持つ子どもの保護者は、しばしば孤立します。わたる君の母親のように、わが子の行動の理由が分からない不安、周囲からの無理解、「育て方のせいではないか」という自責感…。診断がつくかどうかにかかわらず、保護者が抱える不安は大きいものがあります。児童発達支援には保護者への相談支援・家族支援の役割も明示的に位置づけられています。

療育保育士に求められるものは「正しい知識」だけではなく、子どもの行動や保護者の言葉の奥にある感情、課題を受け止め、アセスメントを丁寧に行い、すぐに答えが出なくても関係を続け、相手が受け止められるように柔軟に対応する姿勢も含まれます。「保護者支援」は抽象的なものと考えられがちですが、本作を読むと、それが簡単ではないけれども専門職として獲得するべきものであることがよく分かります。

さて不思議なタイトルの意味をふりかえっておきましょう。「エスプレッソにエスプレッソを足しても苦いだけ。足すならコーラ」。原作者である、ほっかむりゆり子さんは福祉に漫画というエンタメを足すことで衝撃的な味わいを作りだすことを意図したそうです。「それは支援でも人間関係でも同じ。組み合わされば奇想天外な威力になる」からだと（ほっかむりゆり子のX（2025年5月20日）より https://x.com/ryouikuhoikushi/status/1924714271600165171）。

専門職の世界は、同質性を高める方向に動くことがあります。同じ資格、同じ研修、同じガイドラインを共有した人々が集まり、「専門的な正解」を共有しようとするためです。それ自体は悪い事ではありませんが、均質な、型にはまった支援に陥ることになるかもしれません。保育や福祉の現場には、ときに異質なものが求められます。

畑違いのバックグラウンドを持つ同僚、想定外の反応を見せる子ども、支援者の常識を揺さぶる保護者。こうした「コーラ」的な存在との摩擦と化学変化のなかでこそ、支援はより深く、より豊かになっていくのかもしれません。

紹介作品：ほっかむりゆり子（2023-）『エスプレッソ・コーラ』Amazon Kindleほか
https://www.amazon.co.jp/%E3%82%A8%E3%82%B9%E3%83%97%E3%83%AC%E3%83%83%E3%82%BD%E3%83%BB%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%83%A9/dp/B0CDRSMCKQ

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒ sakotomoya@gmail.com